2025年12月4日開催　認知症バリアフリー図書館特別検討チーム研修会

寄せられた質問内容	当チームからの回答
認知症の方が来館された時の対応法	基本的な応対については、認知症サポーター養成講座（90分）を受講されることをお勧めします。個人でも、職場に来てもらっても受講でき、無料です。 「認知症バリアフリー社会実現のための手引き【図書館編】」（2023年３月発行/日本認知症官民協議会）の7頁“日常業務を通した実践 ～接し方を考える”もご参照ください。（複数の職員がいる職場であれば、）貴館で起こった事例等を職員間で情報共有をして話し合うことも、落ち着いた対応に繋がることと思います。
公共図書館の職員や利用者は、どのように認知s症当事者やケアに当たる人々とかかわり、サポートすればよいのか、指針となるものを提示してほしい	「認知症バリアフリー社会実現のための手引き【図書館編】」（2023年３月発行/日本認知症官民協議会）をご覧ください。（参照HP：https://ninchisho-kanmin.or.jp/guidance.html　[2026年2月7日確認]）
来館者の高齢化に対して、図書館としてどのような対応が必要か知りたいです。	「図書館雑誌」（日本図書館協会発行）の以下の号も参照してください。 2018年８月号／特集　人生100年時代に図書館は何ができるか 2021年７月号／特集　健康・医療情報のリテラシー 2022年８月号／特集　認知症にやさしい図書館を目指して また「認知症バリアフリー社会実現のための手引き【図書館編】」（2023年３月発行/日本認知症官民協議会）もご参照ください。（参照HP：https://ninchisho-kanmin.or.jp/guidance.html　[2026年2月7日確認]）
図書館で認知症関連のイベントを実施するとしたら、どんなものが効果的だと思いますか	認知症についての啓発活動を推進している市町村の（高齢者福祉や介護保険）担当課と連携し、相談しながら企画ができるとより良いのではないでしょうか。また、当チームでは、認知症月間の取組事例を収集しHPに掲載しています。2021年度以降の取組み一覧表を参照していただき、イベントを実施している図書館の事例を見てみると、具体的な企画のヒントが見つかると思います。（参照HP：https://www.jla.or.jp/committees/ninchisho/　[2026年2月7日確認]）

2025年12月4日開催　認知症バリアフリー図書館特別検討チーム研修会

寄せられた質問内容	当チームからの回答
市民の健康寿命を延ばすにあたって、有用なコレクション構成（9類の本が〇割、とか、49類の本が〇割とか）があれば教えてください	当チームでは把握していないため明示できません。割合は示せませんが、シニアの健康や生活を応援するコーナーを資料を作っている図書館も増えてきています。チームの取り組み事例を参考にしてください。
自治体の図書館蔵書数が多いほど、地域の高齢者の要介護リスクが低いという関連性があるのであれば、図書館の影響が「医療・介護現場」に波及しているのだとすることもできると思われます。 であれば、エッセンシャルワーカーと呼ばれる人々、とりわけ介護職に就く「ケアラー」の方々と図書館との連携は推奨されることになる将来が予期できます。このときの図書館職員と介護・福祉専門職の協働について、実証データや期待される効果があれば教えてください。 　また、そうなったとき、つまり図書館が健康政策の一翼を担うようになると、図書館職員に求められる役割が増大する可能性があります。これは、図書館職員が“新たな負担を背負うエッセンシャルワーカーになる”ということを含意すると思いますが、この点についての懸念や展望をどう考えますか。 　本講演会の目的とは若干ズレてしまっているかもしれませんが、答えられる範囲で構いませんのでよろしくお願いいたします。	佐藤先生から講演会当日回答をいただいていますが、当チームからも回答をいたします。 図書館職員と介護・福祉専門職の協働についての実証データや期待される効果については、これからの研究成果を待ちたいと思います。 図書館職員が“新たな負担を背負うエッセンシャルワーカーになる”という点について、当チームとしての見解をお答えいたします。図書館サービスは、年齢、障がいのあるなしに関わらず、全ての人に提供されなければなりません。例えば、視覚障がい者に対して、当事者の意見を聞きながら地域の音訳者の協力のもとに音訳サービスや対面朗読を提供しているように、認知症の人にも図書館を利用できるような工夫が必要ということであり、図書館職員が直接介護・福祉を担うことではありません。認知症の人も含めて高齢者サービスの工夫として、関係部署や当事者、家族の声を集め、各図書館でできることから始めることで、役割を果たせると考えています。当チームとしては、これからも、超高齢社会のニーズをふまえた図書館のあり方を、関係する皆さんと一緒に考える機会を作っていきたいと思います。